

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第一主日(6/6)礼拝

「犯罪人の一人に数えられるキリスト」

ルカ福音書第22章35節から第22章38節

ルカによる福音書22:35 それから、イエスは使徒たちに言われた。「財布も袋も履物も持たせずにあなたがたを遣わしたとき、何か不足したものがあつたか。」彼らが、「いいえ、何もありませんでした」と言うと、36 イエスは言われた。「しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい。37 言っておくが、『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。わたしにかかわることは実現するからである。」38 そこで彼らが、「主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります」と言うと、イエスは、「それでよい」と言われた。

1 イザヤ書53章

今日の交読文は、イザヤ書53章です。第二イザヤという暗号めいた名前と呼ばれる預言者をモデルであり、彼の弟子たちがバビロン捕囚から解放された時、師の姿を思い起こして詠ったのではないかとされます。ですが、キリスト者と代々の教会は、イザヤ書53章の苦難の僕にイエス・キリストの姿を見出し、十字架にその身を捧げた主を偲んで、大切に語り継いで来ました。聖書の言葉はみなそうなのですが、特にこのイザヤ書53章は、心を引き締め、身を糺さずには聞けません。すすんで苦難を受ける僕の姿に現れる主イエスの嘆き、悲しみ、痛み。しかし、それゆえにこそ、私たち人間への深く強い愛が読む者の心に迫ってきて、私達の姿勢を糺します。

そのイザヤ書53章の12節を、ルカによる福音書第22章37節でほかならぬ主イエスが引用されています。主は、これまでに数回、ご自身の十字架と復活を弟子たちに予告されました。主の胸にはいつもイザヤ書53章があつたでしょう。ですが、「その人は犯罪人の一人に数えられる」と直接的に引用したのは、ここだけです。世界で最初の聖餐の食卓、弟子たちとの地上での最後の対話の時、主は「言っておくが、『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。わたしにかかわることは実現するからである。」と語られました。もう数時間後には、大祭司達の手によって逮捕され、使徒たちと引き離される、そんな時の主イエスの言葉に聴いていきたいと思ひます。

2 犯罪人の一人に数えられる

さて、「創造者である神が、被造物である人間を審く」それが、神が造られたこの世界の秩序だと聖書は語ります。人間を真実に審くことができるのは、全知全能の天の御神のみ。私たちが暮らす社会には裁判官がいて、裁判を行い人を裁いています。しかし、彼らの裁きは、肉体の身体を持っている間だけ力を持つ裁き、一時的な裁きにすぎません。彼らは死刑判決を言い渡し肉体を滅ぼす権限は与えられているけれども、魂と呼んだらよいのでしょうか、人の存在そのものは滅ぼす事はできません。真に人を滅ぼす事ができるのは、天の御神のみ。

ですから、ここで主イエスが語られた事は、この神の被造世界をひっくり返すようなことでした。「『その人は犯罪人の一人に数えられた』という聖書の言葉が主イエスにおいて実現する」とは、人間が神の御子を裁き、犯罪人に定めて殺す、と言っているのですから。

しかも、それが他ならぬ天の父なる御神の御心であった、と主は語ります。37節「『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。」の「必ず実現する」は、神の意志において実現する、という意味があり、「『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることが、わたしの身に起こるのは、神の御心だ」と訳した方がよい言葉だからです。

なぜ、神はご自身の独り子を、人々が犯罪人の一人として数える事を御心となさるのでしょうか。神の御心は人間には測りしれません。ですが、一つ言えることは、天の御神は、人の罪の核心がはっきりとした姿を表す為、あえてイエス様を犯罪人の一人に数える事を許された、という事ではないでしょうか。神ならぬ者達、被造物である人間達が、ただ神だけが座るべき場所、人を審く裁判官の席について、なんと神を審いている、という逆転した姿を私たち人間がはっきり知る為、主は犯罪人の一人に数えられる、という事が起こったのではないのでしょうか。天の御神は、真の人・真の神であるイエス・キリストの姿を通じて、人間の本当の姿、神と敵対している姿を、私たちに示そうとなさいます。

現代世界を見ても、私達が神と敵対している事は、明らかです。力ある者達、富ある者達は、それが当然の如く、この世界を統治する神の座にふんぞりかえって、欲望のまま傲慢に地球環境を破壊し、弱く小さい同じ仲間を差別し、搾取するという豊かさ故の罪を犯していますし、それが可能となる社会構造を造り上げようとしています。その他の大勢も自分達だけの安心安全を求め、豊かさを求め、小さく搾取される仲間には無関心という罪を犯します。差別し搾取される者達も、また、神を神としようとはしません。貧しさ故の罪、弱さ故の罪を犯します。神が造られた美しい被造世界が、複雑に罪

が入り組んだ悲惨で混乱してしまった世界となったのは、私たちが自分たちを神としてしまった結果だと、聖書は語るのです。世界のそこかしこに、人を審く神への恐れを忘れ、神になろうと争う人間たちがいます。神をも裁きなきものにしようという倒錯した者達が招く混乱が見られます。

しかし、人間の考えからすれば途方もない事なのですが、被造物である人間が、創造者である神を裁くという御子の十字架、人の罪が極まったキリストの十字架にこそ、父なる神の御心でした。人が神の独り子を捕らえて審くのをお許しになる事で神は、愛する独り子を被告席に差し出したのです。そして、犯罪人の一人として、最も過酷な死刑である十字架へと架けさせます。人の罪の最も極まる所に、人が神の独り子を殺す場所に、神の義なる愛である十字架をうち立て、どんなに深い罪を犯した者もこの十字架の主に縋る事ができるためでした。そうして、神は、敵意に満ちたご自身と人間との間の断絶を神の愛で満たし、イエス・キリストという和解のかけ橋をかけてくださいました。神の独り子、神と等しい方が、犯罪人と数えられる事で、神と罪人との間の架橋となってくださった、神と私たち人間の間打ち立てられた平和、それこそイエス・キリストです。

3 敵対するこの世

このように旧約・新約聖書には、神と人間の関係が混乱し倒錯していく様子が描かれています。その過程で、私たち人間の生々しい現実も記されています。自分自身を見てもそうですが、聖書を読んで思うのは、つくづく人間はいい加減なものだという事です。

2021年も折り返しの6月を迎えました。新型コロナ感染はなかなかおさまらず、国民の大半がオリンピック開催に反対しているのに政府は、中止しようとはしません。それは、いざオリンピックが始まって感動的な競技場面をテレビや新聞が流せば、人々は熱狂し政府のコロナ対策の失敗や様々な汚職事件、不祥事など忘れてくれる、と、たかをくくっているからだ、と取りざたされています。私もそうではないかと思えます。権力者は、民衆をコントロールする事などとても簡単だ、とよく知っているのです。実際、世界史を眺めても、独裁政権は似たような事を行ってきました。正義より力のあるほうにつきたい、豊かになれるほうにつきたい、私たち誰しもの心の中にもある想いです。

そんな忘れっぽくて権威者達の意のままに操られる我々の大先輩の姿が聖書には描かれています。民衆は、エルサレム神殿の境内で教えられていた主イエスの話しを聞こうと、朝早くから集まってきました。イエス様の教えが、律法学者のものとは全く異なり、知恵に溢れ、新しく生き生きとした教

えであり、神を信じて生きる事の喜びが溢れていたからではないかと思いません。しかし、そのような民衆の態度は、長くは続きません。主イエスが逮捕され、大祭司の屋敷でユダヤ人の裁判で有罪宣告を受けると、人々は態度を一変させます。当時ユダヤはローマ帝国の植民地でしたから、ユダヤ人には死刑執行の権利がありませんでした。それで大祭司達は、ローマ帝国の総督ポンテオ・ピラトのもとに主イエスを連行します。提督ピラトは、主イエスに何の罪も見いだせなかったので「この男を鞭打って懲らしめてから釈放しよう」と人々に提案します。ですが、民衆は、「この男を十字架に架けろ、十字架に架けろ」と狂ったように叫び続けるのです。主イエスは、ご自身の話しを聞き喜んでいた人々から手のひら返しを受け、十字架へと追いやられます。まさに神を信じる事に徹することができず、容易に強い者の後に従って、神と敵対してしまう民衆の姿が描かれています。

それは、ガリラヤにいた頃には考えられない事でした。35節にあるように、かつては、財布も、生活必需品をいれる袋も持たず、サンダルさえ履かず裸足であっても、主イエスの弟子達は、神の国を宣べ伝える伝道の旅に出ていく事ができました。行く先々で人々が助けてくれたからです。着るもの、食べるものの他に必要なものを分け与え、眠る場所も提供してくれたから。

ですが、主は「しかし、今や」と、ご自身と弟子たちを取り囲む状況は一変している事を告げるのです。この世の人々は、今や、主イエスを憎むようになる。そして主イエスの弟子たちである彼らをも憎むようになる、と言うのです。だから、主イエスは命じます。「財布を持つ者は財布を持って行きなさい、旅の日用品を入れて袋も持って行きなさい、世の人々は、あなた方を憎むのであるから」と。そして、「剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい。」とまで仰います。この服というのは、裾の長い上着のことで、貧乏な庶民は、夜はこの上着を布団として寝ていたそうです。

4 剣について

ここで主イエスが「服を売って剣を買いなさい」と言われた事を根拠に、キリスト者でも武力によって反対者と対抗してよい、と考える人々も出てきました。この箇所を解釈を巡って、長い論争が続いたようです。果たして「キリスト者を憎む者達がいるから、武器を用意し、力で対抗しなさい」と主は、おっしゃっているのでしょうか？

この場面の数時間後、主イエスは、イスカリオテのユダの裏切りにより、大祭司から差し向けられた人々に引き渡されます。その時、弟子の一人が、大祭司の手下に剣をもって打ちかかり右の耳を切り落とす、というアクシデ

ントが起こります。しかし、主イエスは「やめなさい、もうそれでよい」と弟子を制止して、手下の耳に触れて癒された、とあります。ルカは記していないのですが、マタイ福音書では、この時主イエスが、「**剣を取る者は皆、剣で滅びる**」(マタイ26:52)と語られたことも伝えられています。そして、ルカ福音書やその続編と言われる使徒言行録でも、主イエスの弟子たちが剣を使った、というのは、たった一回切り、この場面だけです。どんなに激しい弾圧や迫害があったとしても、主イエスと使徒達は、非武装、非暴力を貫きました。だから、主イエスがここで「剣を持っていない者は、服を売ってそれを買いなさい」と言われているのは、決して「武装して武力で対抗しなさい」と言う意味ではありません。ここでは「布団になる上着を売っても剣を手に入れねばならないほどに人々はあなた方を憎む夜の時代が来る」という主イエスの弟子たちへの警告なのです。主は、「それほどに厳しく、この世はあなた方を憎む、迫害する」という事を弟子たちが知って覚悟して欲しかったのだと思います。決して武装しなさい、と仰ったわけではありません。十二人の使徒達、つまり後の教会が直面する闘いで、剣は何の役にも立たないからです。剣はシモン・ペトロを助けはしないし、使徒達を助けはしない、教会を助けはしない。剣によっては、イエス・キリストのもとへ誰一人として連れて来る事はできない、剣で、イエス・キリストを証する事ができないからです。

しかし、この時点で使徒達は、剣は助けになると考えました。彼らは、主が語られる「その人は犯罪人の一人に数えられた」というイザヤ書の引用には心を留めず、ただ剣の事だけに反応する事から明らかです。「主よ、**剣なら、このとおりにここに二振りあります**」と。主イエスはこれを聞き、彼らが今はご自身の心を理解できないと知り、こう言われたのです。「この話はもう十分だ。この話題はここまでだ」と。主は、聖霊が降って弟子たちが主の言葉を理解できるまで待つことにされたのでしょう。

5 「この世へ出て行きなさい」

主の預言通り、この世の人々は、主イエスの弟子たちを憎むようになります。神を憎む、神をいない者にしようとする、神とは関係なく生きようとする、それが私たち人間の中核にある自己中心的な生き方だから、迫害は起こるべくして起こる事です。主イエスの十字架と復活、昇天、聖霊降臨の出来事を経た後も同じです。使徒達が激しい迫害や反対にあった様子は、ルカ福音書の続編である使徒言行録やパウロの手紙で明らかです。神を殺そうとする人間の本质は現代世界でも何も変わりません。確かに目に見える迫害は、少なくなっているのかもしれませんが、しかし、信仰者を神から引き離そうと

する力は、至る所で働いています。私達の内にも絶えず働いています。目には見えない敵、「この世」との戦いは、私たちキリスト者の日常生活の現実です。

ですが、主イエスは「私を信じる聖い人間だけ集まり、他の者たちとは付き合うな。」とは決して仰いません。寧ろ、逆です。「この世へと出て行きなさい。私への敵意が渦巻くこの世へと出て行き、イエス・キリストの十字架と復活により神との間に平和が成し遂げられた。神の御子は私たちの兄となってくださり、神は私達の父となってくださる。この神との平和に生きようではないか、と人々に呼びかけ、言葉と行いによって私の証人となりなさい」と使徒達に、私たちに命じておられます。その為に、私たちが主に敵対するこの世、私達の内に入り込む「この世」に於いて主の証人となる為に、霊なる御神、聖霊を与えて下さいました。神に敵対する“この世”で、イエス・キリストの証人となる、それがイエス・キリストの弟子達の闘いです。

そんな主イエスの御心に生きた中村哲というキリスト者の医師を紹介したいと思います。有名な方で、前にも説教で取り上げたので、皆さんも知っている方だと思います。中村哲医師は、キリスト者でしたが、イスラム教徒であるパキスタンやアフガニスタンの人々と寝食を共にし、住民の治療の為に危険な地域を駆け回りました。その結果、「食べ物がなくては病気も治らない、病人たちを救うには農業再生しかない」と気づきます。そして荒れ野に25キロにもわたる用水路を掘削し、砂漠を緑の沃野に変える、という大事業を成し遂げます。

ソ連の侵攻以来、アフガニスタンではソ連と米国の戦いが繰り返されました。ようやくソ連が撤退した後、膨大な武器が残され、今度は部族どうしが争う内戦状態を迎えます。その後には、米国中心の国連軍がアルカイダ掃討作戦をアフガンで繰り返します。更には度重なる旱魃が襲い、国土は荒廃しきり、農作物は収穫できず、多くの人々が飢えて生死の境をさまよっていたのです。中村医師は、持ち前の行動力を駆使し、門外漢の灌漑事業に着手し、現地の人々やボランティアの仲間と共に、遂に、数十キロの用水路を砂漠まで引き、不毛の地を緑の畑に変え、農村の再生を果たしました。その中村哲兄はこう言っています。「信頼は一朝にして築かれるものではない。利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない誠実さこそが、人々の心に触れる。それは、武力以上に強固な安全を提供してくれ、人々を動かすことができる。」アフガンの部族社会は、複雑に地縁血縁が入り組んでおり、裏切りが横行する社会。同国人でさえ手に負えない百戦錬磨の族長達に中村哲兄は、徹底して誠実に接しました。そうして信頼関係を結び、本当に命を守る事に必要な事業を成し遂げました。私は中村哲兄の手記を読んでいて思

い知らされました。私達日本に住むクリスチャンは、呑気なものだ、と。主イエスの教えを守らなくても、毎日それなりに命をつないでいける。「あなたの敵を愛しなさい」と言う主の言葉に「敵を愛するなんて絶対無理。出来るわけない」と無視しても、すぐに殺される事はありません。だから、主の命令にたかをくくり蔑ろにして、それを恥じる事もない、それでも生きていける、と思っているからです。ですが、中村哲医師たちは違う、裏切る敵を愛し誠実に接するという事が、どんな武器にも勝って命を守るという事を日々実感しつつ生きている。そして、それは日本でも同じなのではないか。主イエスの教えを蔑ろにして生きている内に、私達の父なる御神の御前での命はしぼんでいっているのかもしれない、と思わされました。

そんな中村哲兄を支えていた言葉は、「神、我と共に在り」だったそうです。裏切られても裏切り返さない、利害を超え、忍耐を重ねる、そういう誠実さを可能としたのは、十字架と復活の主イエス・キリストでした。その中村哲兄は言います。「武器があふれるアフガニスタンで、皮肉な事に“武器を使わない”という事が最大の強みとなった。」「私達の用水路掘削を最大に助けてくれたのは、日本の憲法九条です。“決して戦わない、という憲法を持つ日本人は、我々の敵ではない”と何度も命を助けられました。」と。

そして、この大事業は、当然ながら中村医師一人や彼が設立したNPO人々の力だけで成し遂げたわけではありません。沢山の現地の人々の力があり、多くの人々の力が一つとなり成し遂げたものでした。この一事を通して、主イエスが私たちに与えてくださる聖霊の力は、神と敵対し裏切りあい争いあってきた人々を、焼けた不毛の地に用水路を通す事に力を尽くす人々に変えるほどの力だとわかります。聖霊の力は、暴力ではありません。武力ではありません。人を変えて、イエス・キリストの証をさせる力です。キリスト者だけでない、全ての人に働く力です。

そんな力が、こんなポンコツの私にも与えられています、皆さんにも与えられています。考えるだけですごい事です。この世に主イエスを証していこうとする私たちには、主イエスご自身が共に行ってくださいからです。主イエスに勝る以上の武器はありません。これからの一週間、様々な試練があるでしょう。しかし、イエス・キリストが共にいてくださる。敵であった私たちの為に命を投げ出してくださいましたお方。味方となった今、主は私たちを悪い者から守ってくださいます。希望をもって主イエスを証していきたいと願います。